

## 連載 プロマネの現場から

### 第 81 回 ふくろしよい&あかいだき・『古事記』のこころ

蒼海憲治(大手 SI 企業・金融系プロジェクトマネージャ)

昨年末、全国から神様が一同に会するという神在祭を見るため、出雲大社にお参りしました。伊勢神宮と同様、出雲大社も 60 年に一度の式年遷宮を終え、新しいお社を見ることができました。旧暦の 10 月は「神無月」といいますが、ここ出雲では逆に全国の八百万の神様たちが集まる「神在月」となります。昨年は、12 月 1 日に、出雲大社の西側にある稲佐の浜から、神様たちが上陸する神迎祭から始まり、約 2 週間余りの神事がとり行われました。この出雲の地は、先日以来こだわっている本居宣長さんが解説した『古事記』の舞台になります。仕事の合間に手に取った『古事記伝』の難しさに閉口して、最近手に取ったのは、阿部国治さんによる『新釈古事記伝』の 7 冊のシリーズ本でした。『古事記』の訳書は多数出ていますが、その多くが子供向けに意識されたものになっています。ところが、阿部さんの解釈を通して『古事記』を読み直すと、そこには大人が人生を生きていく上での教えがふんだんにあることがわかります。新年にあたって、出雲大社にちなんだ大国主命の物語を紹介したいと思います(※)。

#### 『袋背負いの心』・『ふくろしよいのこころ』

稲葉(因幡)の国に、八上姫という日本一の姫神を知った大国主命(おおくにぬしのみこと)の兄弟である八十神たちは、八上姫の「嫁取り競争」のため、稲葉に行くことを決めます。

しかし、太古の昔において、地図もなく宿もない中、旅するには大きな荷物が必要となります。そこで、八十神たちは、大国主命に自分たちの荷物を持たせることを思いつきます。

「大国主命は八十神たちが荷厄介に思われ、面倒に思って嫌われた旅行道具を一切引き受けて、大きな袋にお入れになり、これを背負われました。この袋を背負われる気持ちが非常に大切だと思います。」

「できるだけたくさん、人さまの世話をやかせていただくことが立派なことであると、教えられているのであります。」

「できるだけたくさん、他人の苦勞を背負い込むことを喜びとせよ」と、教えられているのであります。」

ただし、人のお世話をしている自分を偉いとか、感謝してもらおうとするのはいけない、といいます。

◀「これは大事な仕事である。しなければならぬ仕事である」  
とあって、その仕事をするなら、それでもうすべてなのであります。  
その仕事をする事、それ自身が喜びであり、感謝なのであります。

仕事の中では、人さまの苦勞を背負うことが、いちばん大切な仕事であります。  
これが大和民族の受け持ちの考え方、本分という考え方であります。≫

この様子を表した歌として、江戸時代の歌人で、「たのしみは」ではじまる『独楽吟』（どくらくぎん）で有名な橘曙覧の『大国主命』があります。

八十神に ひとりおくれて 負ひたもふ 袋にこもる 千のさきはひ

この八上姫に出会う旅の途中に、ワニをだましたため、体中の毛をむしられた「因幡の白兔」のエピソードがあります。

ウサギが痛みに泣き悲しんでいると、先に来た八十神たちは、「海水を浴びて、高い山の風に吹かれて寝ている」と言うので、そのとおりにしたところ、傷口に塩を塗るの言葉のとおり、ウサギの体はよりひどくなりました。その後やってきた大国主命は、「今すぐ河口にいて、真水で体をよく洗い、蒲黄（がま）の花粉を敷いて、その上に寝ころべば、きっと毛も生えるよ」とアドバイスすると、そのとおり、ウサギは毛も元通りになり元気になりました。

ウサギは喜び、「八上姫は、先に行った八十神たちではなく、心根の優しい大国主命の求婚を受ける」と予言します。その予言のとおり、八上姫は、大国主命を結婚相手に選びます。

『あかいだき』・・・『赤猪抱き』・・・赤い猪を抱きかかえるの意味

ところが、大国主命に「嫁取り競争」に負けた八十神たちが逆恨みして、伯耆の国の手間山にいる赤猪を退治しようと、大国主命にもちかけます。

八十神たちが山の上から赤猪を追い出して、大国主命に捕まえさせる、という計画を立てます。しかし、八十神たちが大国主命に捕まえさせたのは、赤猪ではなくて、真っ赤に焼けた大石で、それを全身で受け止めた大国主命は死んでしまったのでした。

『ふくろしよいのころ』を持って仕事をする時、このように赤猪を抱かねばならない場合があります。阿部さんは、『ふくろしよいのころ』の窮まるころは、死の覚悟である、といいます。

《したがって、昔から、本当の仕事をするときには、

「神さまを相手にせよ」

とか、あるいは

「天を相手にせよ」

とか申します。》

《《ふくろしよいのころ》を持って《あかいだき》をいたしますのは、

それによって、名を得ようとも、利を得ようとも思っておりません。

ただ、その場合の、自己の本分を実行しているだけであります。

いわば、無念無想の行動、三昧の行動であります。》

『古事記』は、非常に簡潔な文章でできています。しかし、その行間・・・一言一句の中に、大和民族の知恵や理想が表されているといえます。どの民族や国民にも、その土地の精神性を表現するものがあるのだと思いますが、『古事記』を繙いたのが、本居宣長さんであり、この阿部さんの労作だと思います。

この一年、さまざまなことが起こると思いますが、《ふくろしよいのころ》を持って《あかいだき》をする心持ちで臨めば、たいていの困難に対処ができるのでは、と思っています。

ちなみに、大国主命は、《ふくろしよいのころ》を持って《あかいだき》をした結果、一度は命を落としたものの、「うるわしきおとことなりていであるきき」・・・《うるわしきおとこ》となって、行き働いた、といえます。

(※) 阿部国治『袋背負いの心 (新釈古事記伝)』 日本講演会、1999年刊